

《4》市立学校の取組

① 小学校英語の実践「英語となかよし」(中区・立野小学校)

1 立野小学校と「英語となかよし」の始まり

立野小学校はJR山手駅目の前に立地しています。学区には古くから外国人が多く居住しており、国公私立の学校が点在する地域です。近くにはYCAC(ヨコハマ・カントリー・アスレチッククラブの略)や根岸外国人墓地、根岸森林公園などがあります。帰国児童や外国籍児童も多く在籍しています。ヨコハマ・インターナショナルスクールとサンモール・インターナショナルスクールに通う児童の体験入学も毎年実施してきました。立野小学校の児童は外国文化と接する機会も多く、英語を話したり、聞いたりする機会にも比較的恵まれた環境であるといえます。このような地域性を学校の

特色として生かすため、平成12年度より、地域のみなさん、保護者のみなさんの中から、英語活動に取り組んでくださる教育ボランティアを募集しました。3年生以上は「総合的な活動の時間」を、1、2年生は立野小学校が独自で設定した「英語活動の時間」を活用して「英語となかよし」を創設し現在に至っています。

『英語となかよし』のコンセプトは「外国の人々との挨拶や会話等を臆せず自然にできる子を指し、英語に親しみをもてるようにすること」としてあります。さらに17年度からは、担任がボランティア(16年度よりサポーターと呼称)の力を借りて授業を進める「ティームティーチング」の形を明確化して授業の実践研究を進めています。

2 「英語となかよし」の目指すもの

① 立野小学校の「めざす子ども像」

- ・自分の知っている英語を使い、進んでコミュニケーションを図ろうとする子ども。
- ・相手の言っていることをよく聞き、理解しようとする
- ・とともに、知っている英語を使い、進んで思いや考えを伝えようとする子ども。
- ・自他共に、人・言葉・文化を理解し、尊重しようとする子ども。

② 「英語となかよし」の全体目標と具体目標

〈全体目標〉

- ・英語によるコミュニケーション活動の楽しさを味わい、自分の思いや考えを進んで伝えようとする。
- ・音声による、聞く・話す活動を中心に、英語に楽しく

触れ、慣れ親しむ。

- ・英語を通して異文化に触れ、自国の文化と比較しながら、互いの文化の違いやよさに気付き、尊重することが出来る。

〈具体目標〉(低・中・高学年別に設定)

- ① コミュニケーションへの関心・意欲・態度
- ② 聞く力・話す力
- ③ 異文化理解に関する資質や能力

3 「英語となかよし」の実際

① 指導体制

担任、AET及び英語活動サポーターのティームティーチングで行います。授業時数については「Aパターン(30分)」と「Bパターン(45分)」の2パターンに分けたタイムスケジュールで授業を展開しています。(表1参照) 今年

執筆者

三浦 和弘 ほか

横浜市立立野小学校長

表1 授業の回数(年間)

	1年	2年	3年	4年	5年	6年
Aパターン(30分)	26回	25回	25回	26回	12回	8回
Bパターン(45分)	6回	7回	7回	6回	18回	22回

表2 授業時数(年間)

	1年	2年	3年	4年	5年	6年
英語活動「英語となかよし」	23時間	23時間	23時間	23時間	26時間	27時間
小学校国際理解教室	5時間	5時間	6時間	6時間	5時間	5時間
合計	28時間	28時間	29時間	29時間	31時間	32時間

*Aパターン(30分)Bパターン(45分)の総時間数を45分=1時間として換算しています。
*個別支援学級の児童は交流級で授業を行っています。

参考1

「英語となかよし」のあゆみ

○平成十二年度

●九月より「英語となかよし」の名称で、三名の地域ボランティアのお力をお借りし



度は、各学年とも年間28時間を目安に授業時数を設定しました。来年度は、平成21年度に予定されている横浜市の英語活動完全実施（全学年35時間）に向けて、国際理解教室と合わせて年間35時間を目指し内容の充実を図っています。（参考1参照）

② サポーターとのチームティーチング

本校の英語活動「英語となかよし」を支えてきたサポーターは、指導者としてだけでなく、授業計画の作成についても中心的な役割を果たしてきました。小学校での英語活動に関するカリキュラムが存在しない中で、子どもたちが「興味・関心」をもって楽しく英語に接することができるように、授業内容を創意工夫し、レッスンプラン（授業計

画）を独自に作成してきました。このような、サポーター中心の指導体制が5年間（平成16年度まで）続きました。その間に、現在の立野小学校の独自カリキュラムの土台となった「あしあとカリキュラム」が作成されました。「あしあとカリキュラム」とは、授業実践を重ねながら、1年間の活動内容を残していった記録です。サポーターはこの記録をもとに子どもの反応がよかつた活動は残し、改善が必要な内容は修正するなどして、次年度の計画を作成しました。このような積み重ねの結果、年間活動計画の内容は年々練り上げられ、より充実したものとなりました。

平成17年度から学級担任が中心となり英語活動を進めていく指導体制に変わり、より段階的・系統的なカリキュラムを目指して、カリキュラムの見直しを行いました。立野小学校の場合、カリキュラムの作成がゼロからのスタートではなく、土台となる「あしあとカリキュラム」があつたため、スムーズに内容を見直し、再構成することができました。これは、一重にサポーターの力と、実践の積み重ねに負うところが大きいものと考えます。

現在では、サポーターととも

- タート。
- 全クラス、毎週一回（二十五分間）ボランティアの方々が中心となつて行う。
- 平成十三年度
- 新たなボランティアを迎えた。
- 一年間の活動を「あしあとカリキュラム」としてまとめる。
- 平成十四年度
- ボランティアに新たに二名の方を迎える。
- 「あしあとカリキュラム」の見直しと、反省アンケートを実施。
- ワールドカップ開催にあわせて関連の言語材料を使用。
- 平成十五年度
- 時間の枠組みを再検討し、従来の二十五分をAパターンとし、新たに四十五分のBパターン（三年生以上）を新設。
- 平成十六年度
- 一年から六年までの内容が系統的・段階的になるように年間指導計画を組み直す。
- 横浜市の「国際理解教室」との連携も図る。
- 高学年は仲尾台中学校の英語科教諭と連携し内容を整理する。
- ボランティアの方をサポーターと呼称し、各学年とも二名の態勢に。
- 神奈川県の一小学校英会話活動研究委託校「横浜市の一地域人材を活用した英語活動推進校」に指定。
- 二子でも英語（アルク十二月号に掲載）。
- 平成十七年度
- 担任がより積極的に関わり、中心となつて進めていく形態に。
- 五分間のふり返し時間もち、二十分の授業時間とした。
- 「国際理解教室」の外国人講師、IUI (International Understanding Instructor) や横浜市の小学校英語活動推進校に配置されている。
- 英語指導 AET (Assistant English Teacher) を迎える。
- 神奈川県小学校英会話活動研究委託校（継続）、横浜市小学校英語活動推進校（継続）、バイオテラス（よこはま）(SY)（仲尾台中学校との小中連携）指定校となる。
- 平成十八年度
- 文部科学省委嘱事業研究開発学校（英語）

ことで、より多くの子どもが頑張りを認められ、自信をもち、意欲を高めることができず。子どもへの支援の手が厚くなることも、サポーターの大きな存在価値といえます。

今後も、担任とサポーターが互いのよさを生かしながら協力し、子どもたちが英語を使用したコミュニケーションの楽しさを味わい、英語をより好きになれるよう、英語活動の充実を目指して取り組んでいきたいと考えています。

③ 授業の実際

6年生のある日の授業を紹介します。トピック(題材)は「何の科目が好き?」この日の授業は担任、サポーターさん、AETの3人で行われました。「Good morning. How are you?」とごつもの挨拶が交わされた後、黒板に教科書の表紙の絵(ピクチャーカード)が貼られました。算数の教科書を指して、AETやサポーターが「Math」と言う子ども達も大きな声でまねします。「図工はArt」「体育はP.E.」「理科はScience」…。何回かくり返すうちに子どもたちは次々と科目の名前を覚えていきます。だいたいみんなが覚えたところで、ゲーム

が始まります。今日のゲームは「カード・ゲット・ゲーム」です。グループ毎に机の上にも8枚(国語、算数、理科、社会、図工、音楽、体育、家庭科)のカードが置かれます。子どもたちは手を頭の上に置き、AETの言葉待ちます。

「Music」誰が一番にカードをゲットできるかを競います。子どもたちは真剣に耳を澄ませています。聞くことが英語の一番のポイントです。「大好きな曲」だけは取るぞ」「一番たくさん取ってチャンピオンになりたいな」それぞれに自分のめあてをもって取り組めます。担任とサポーターは各グループに入って一緒にゲームを楽しみます。グループの様子を見て自信のなさそうな子がいた場合、その子の応援に入ることもあります。このゲームが終わる頃には、ほとんどの子が日本語の科目名と英語の発音が一致してきます。こうやって子ども達はゲームを通して楽しく英語を学んでいるのです。

次に、指導者3人のやりとりを見せます。「What subject do you like?」「I like P.E.」「I like music.」…「何の科目が好き?」と聞いているから「〜が好き」と答えられ

ばいいのだな。3人のやりとりを見たり聞いたりしている間に、いちいち日本語に訳さなくても表情やアクションから、子どもたちは意味を理解します。さて、次の活動は「6年2組の人気科目目ランキングを調べよう」です。一人一人に「What subject do you like?」と質問され、全員が「I like〜」と答えていきます。「〜さんは私と同じ理科が好きなんだね。」「先生は国語なんだ、意外だなあ。」「こうやって英語活動を通して友だちや先生のことを知ることができます。40人全員が自分の好きな科目を答えることができました。第一位はやはり予想通り、「PE」でした。サポーターさんとAETのおかげで楽しい活動となりました。これで、今日の英語の授業は終わりです。

このように、小学校では「聞くこと」「話すこと」を中心に英語の活動が繰り返されていくのです。

4

「英語となかよし」と 小学校での英語

小学校で英語に親しむ子どもたち
メリット
と課題

立野小学校で英語を学んだ子どもたちは、中学校入學後どのような学びを続けていくのでしょうか。その様子を隣接する仲尾台中学校の英語教諭とともに考えてみました。

第一に、指摘できることは「立野小の子どもたちは、英語に対する壁が低い」ということです。英語学習に対する姿勢が前向きで、多少分からないうことがあっても、諦めずに取り組むことができます。プレゼンテーションなど発表学習のときに、全員発表することができず。英語学習に取り組む際のハードルが低く、積極的に学習を進めることができます。

第二は、「聞く力に優れ、発音もしっかりしている」ということです。音声中心に英語学習を進め、小学校低学年からネイティブの正しい発音に接してきた結果だと思われる。中学校においても、できるだけ早い時期から英語を用いた授業を進め、生徒が発言する機会を多くとれるように工夫しています。

横浜市では「国際理解教室」を小学校全校で実施しています。その効果を意外なときに感じます。従来、英語というと、アメリカ、イギリスなど

を連想することが多かったのですが、最近の中学生は「国際理解教室」の授業で多様な国の「人」や「文化」に接した経験から、外国のとらえ方に幅の広さがあります。また、英語について、それらの人々との交流を通して異文化を理解する「手段」としてとらえています。

最後に、「小学校との連携」という視点から中学校英語の今後の課題について述べます。市内の小中学校の中には、英語に取り組んでいない小学校も多くあります。中学校入學後、生徒の実態をいち早く把握し、習熟度別や少人数による学習も取り入れ、柔軟に指導しています。また、地域のサポーターに協力をお願いして、生徒一人ひとりの実態に応じた取組を行っています。立野小学校を卒業した子どもたちにも「話す」「聞く」はできますが、「書くこと」に対する抵抗感が強い子どもがいます。これは、文法上の理解不足や「音」と「つづり」が結びついていないことによるものと思われまます。「言えた」ことについて「文章でも表現できる」ことを目指して、今後指導を工夫していきたいと考えています。

『英語となかよし』立野小における英語ボランティア活動の軌跡(2000年～2006年)

碓井 勢津子さん

森田 宣子さん

横浜市立立野小学校はJR山手駅前に位置し、昨年度新校舎が落成、英語ボランティア=サポーターであるわたしたちも美しいデザインの校舎にて心新たに活動いたしております。今年で七年目になります立野小学校における英語教育の足跡その他を述べてみたいと思います。

2000年4月、住田平吉校長の思い—日常的に伸びやかに英語を話す子どもたちを育てたい。地域性を鑑み、教えてくれる人を地域で探そう—児童の各家庭、町内会などへ募集が始まりました。わたしは近隣のPTA役員からお話を受け、空いている日ならと即答いたしましたところ驚かれました。「継続的に」との言葉でなかなかOKが得られなかったとのことでした。(わたし自身は数回の引っ越し—海外も含め—をしつつ、自宅にて幼稚園生から高校生まで、全人教育を念頭に置きながら25年間英語を教えて参りました。)9月からイギリス人、フェルナンデスさん、森田さん、わたしの三人で始め、その後数年間補助の方(60,70歳代の方も)とペアを組み、二学年各三クラス週1回を担当いたしました。毎回の授業プラン及び教材づくりと大変ではありましたが、自由な発想可能な授業を、とても楽しくさせていただきました。2001年2月には、保護者も参加の大きな視察会があり、それが校外への初めての「発信」の日であったと思います。一方、スタートから立野小での英語教育活動を支え、わたしたちボランティアをも、ユーモアと細やかな配慮で支えてくださった桐山茂和先生を忘れることはできません。神奈川県内でのパネルディスカッション、教材選択など様々思い起こされます。そして、同年4月から丸山進校長、2004年から三浦和弘校長に順次引き継がれ、年ごとに責任をもったレギュラーボランティアが増えて参りました。

2005年から、授業は担任の先生中心にAETも加わり、わたしたちもサポーター—という呼称のもと補助の役割に変わりました。AETのジェイミーさんは毎日来校のため、職員室内はプチ国際化?!、諸先生も英語色に染まりつつあります。

小学校教育は教育の原点といわれます。子どもたちが初めて接する教育内容はよりよいものであることは望ましく、英語教育においても、YES・NOの要求や押しの強さが日本人向きとは言えない分、相手に対してよい発音(「ほんとに発音がいいわね」の効果絶大)と豊かな発想の表現力(ただしゃべることができるではなく)などをキラリと光る教育によって身に付けていって欲しいと念じる



今日この頃でございます。また、未来へ向け国際社会において、日本人として立派に活躍する次世代の子どもたちが、よりよい英語教育を受けられますよう、微力ながらこれからも協力を惜しまないつもりであります。Thank You.
P.S. 「活用されていない中学・高校英語教員免許取得」者の発掘採用は、ショートカット(近道)

「自由にやってくれていいよ。難しいのはだめだよ。子どもたちが自分から進んで英語を話すようになってくれれば充分。」

これが当時の住田校長と英語を始めるにあたり、初めて交わした会話です。7年前の春、学校から家庭に配られた教育ボランティア募集のお知らせの英語の項目に、保護者としてたった一人、丸をつけたわたし。そして、その後集まった地域のボランティア2名と共に、手探りの「英語となかよし」が始まりました。

中学1年の時、シアトルの公立中学校に転校したわたしは、「言葉が通じないというのは、こうも大変なことなのか?」と、身をもって感じた経験があります。知っているはずの単語が聞いたことのない音にしか聞こえなかったり、アクセントの位置が違うと全く通じなかったりすることはしょっちゅうでした。自分の意志を伝えるためには、いかに正しい発音で話すことができるかが重要だったのです。日本の子どもたちも、小さいうちから英語に親しみ、正しい発音を身に付け、通じる英語を話せるようになって欲しいという願いからボランティアに参加することを決めました。当初は、活動案から教材まで全てボランティアの手作りでした。動物や食べ物のカード、校長先生の似顔絵の福笑いも作りました。台所の床で大きなピザの台紙に色を塗り、載せる具材のカードを何種類も用意したこともあります。英語劇「桃太郎」や「大きなかぶ」では、短く覚えやすい表現を心がけました。サッカーのワールドカップが開催されたときには商店街に万国旗がはためいていました。「どこの国ですか?」「どこの国に行きたいですか?」子どもたちが今正に興味のある事柄を取り上げると、みないきいきと答えます。マニュアル—辺倒ではないタイムリーな話題も加えていくことは、広い知識を身に付けるためにも大切ではないでしょうか。

この七年間、試行錯誤の日々でしたが、子どもたちの笑顔、そして「えっ!もう終わり?もっとやりたい!」この言葉に支えられて来た気がします。今後は、子どもたちの成長に合わせた活動内容に対して、無理がないか、あるいは退屈していないかと一人一人の反応をきめ細かく見守っていくということがわたしたちボランティアの役割であると思っています。そして立野小学校はこれからも英語教育をリードするチャレンジャーであれ!とエールを送り続けるつもりです。

